

PHD LETTER

<20>

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 1986・9

PHD運動とは1962年(昭和37年)より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事された岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年(昭和56年)からはじまりました。

発行:財団法人PHD協会
 編集人:草地賢一
 住所:〒650 神戸市中央区元町通5-2-3
 甲南サンシティー 元町ビル711 TEL(078)351-4892
 郵便振替:神戸1-29688財団法人ピー・エイチ・ディー協会
 定価:100円
 レイアウト:エフアンドエフ

- フォローアップレポート.....P. 3
- 「KOBE発アジア」出版記念交流会.....P. 6



スマトラの漁師

網を引く 人が網を引く
 舟のオールは持って帰ろう
 腰にひもを巻きつけて、熱い砂に踏ん張る
 ただ網が引かれてくる

沖に小舟や帆船が浮かんでいる
 私たちは風が吹くのを待っている
 波に耐える弟よ
 沖で耐える私たち

かれいは絹のようなひれをしているが
 浜にはただ、ござだけが干してある
 弟よ、もう一度助けてくれ
 もうずいぶん何も食べていない

網を引く 人が網を引く
 舟のオールは持って帰ろう

切り花



真鍋正志

まなべ まさし
PHD協合理事
現在、神戸新聞社監査役。

「技術移転」ということが時々使われます。あまり、一般には馴染んでいませんが、進んだ国の技術が、これから発展しようとする国に移り、使われる、つまり「移転」することです。日本にもアジアの国々から求められる技術はいろいろあるでしょう。

もともと、いまでも技術立国などといっていますが、日本も明治以来、懸命に欧米先進国から学び、学問や知識を吸収したことはよく知られているとおりです。

戦後、原子力の平和利用を進めた時も、海外先進国からまず教えてもらってスタートしたのです。

そのころ、よくいわれたことに、「切り花に

してはならぬ」という反省があります。進んだ技術の実用的成果を急ぐあまり、花は花でも活け花のように切られたままで、根づかないなら、自分の技術として消化したことになる。基礎が大事というわけでした。

確かにそういうことはいえそうです。このころ、はまばなしい高度技術、先端技術の交流も目につきますが「切り花」にしてしまっ

ては豊かな将来に結びつきません。途上国への技術移転がその地域にしっかりと根づくために、日本としても真剣に協力したいのです。そのためには技術開発が持っている「光」と、半面の「影」についても正しく伝える姿勢が必要でしょう。

「影」—例えば公害つまり環境問題です。アジアの国々からは断片的な情報しかありませんが、工業化、近代化、産業化、によって自然破壊や環境汚染が起こっており、それには日系企業の関わりも少なくないと聞くのです。公害について、日本は多くの経験をしており、情報が蓄積しています。日本での公害が、なぜ、どのように起こり、どんなに困ったか、どうすればよいか、などの情報を提供するの

も技術移転の一面と思うのです。人と人との、国と国との、信頼がそのへんから生まれるのではないのでしょうか。

架け橋

結核をなくす為にも PHD運動を

PHD運動提唱者
PHD協合理事 岩村 昇



5月20日にタイに赴任した岩村博士から第一報が届きました。現在はタイの首都バンコク郊外のマヒドール大学にある研究研修センターでの仕事にとりかまれています。7月初めに、草地総主事から博士を訪ねましたが、とても生き生きとやっておられるようです。タイの草の根の人たちから新たな学びを得て、また我々に伝えてくださることでしよう。

私は、この5月20日から、再びなつかしいアジアの草の根にかえらせていただきました。以前には皆様の浄財のおかげでネパールに、今度は皆様の税金のおかげでタイに住みつかせていただき、感謝であります。タイも、ネパールをはじめ他のアジア発展途上国と同じように、人口の大半は農村に住む草の根の人達です。その大半は無医村に住み、この草の根の人達の死亡原因の第一は結核であります。そして、その結核の背景に貧困と慢性栄養失調があるのも、タイ、ネパール、アジア発展途上国の草の根に共通の様相であります。日本政府は、タイ政府の要請に応じて、ブライマリ・ヘルス・ケアの研究研修センターを、

バンコク郊外のサラヤにつくりました。ブライマリ即ち草の根の生活現場で、草の根の人達が自分達のヘルス・ケア即ち健康問題を自分達で解決出来るようにする為の研究と研修を、タイの医師だけでなくアジア諸国の医師達が、このセンターに集まって行うのであります。私はこのセンターから更にタイの無医村に出張して、草の根の結核対策が(草の根の人達自身の手で即ちブライマリ・ヘルス・ケアの範囲で)、これだけ出来るのだというモデルづくりの研究を始めました。ほんの二ヶ月の経験ですが、次のようなことがわかりました。

- 1)草の根の人達が助け合って生きている生活共同体(コミュニティ)があるならば、
 - 2)その草の根生活共同体の中心に、献身的なリーダーがいるならば、
 - 3)その献身的なリーダーを支える仲間がいるならば、
- ブライマリ・ヘルス・ケアの範囲で草の根結核対策が75パーセントは可能である、という事です。ところで、上記1)も2)も3)も、タイの草の根にあるのですが、他のアジア諸国と同じように、激しい近代化の波にさらされて、放って置くと、次第に消え去って行きつつあります。それを復活させるのがPHD運動であります。タイには良く耕された畑があります。播かれた種は必ず芽生えます。タイPHD研修生を支えて下さい!!

フォローアップツアーレポート

問われる草の根の人々に関わる基本姿勢

去る六月八日から七月三日まで、ネパール・タイの研修生を問安してきました。ネパールでは、帰国した八人の青年全員に会うことが出来ました。又、タイでも今年帰国したプリチャー・ムンチャン君を訪ねました。カトマンズで、六人の帰国研修生との会合を持ちました。次のような、大変建設的な意見が出されました。

- ネパールの国内で、相互に訪問しあい各々の実践を学び合おう。
 - 実践をまとめて、年二回報告会をしよう。
 - PHD以外の実践の現場を尋ね、自分の課題を深めよう。
 - そのために、首都に在住する者が互いの動向及び、他の実践に関する情報をまとめて提供しあおう。
- これらの話し合いは、PHDカトマンズステーションとい

うラインフォーメーション スポットを作るという結論に達したのです。

われわれは、日本のPHDと個々の研修生とがタテ糸のみでつながり研修生同志のヨコ糸の関係が弱いこと、これが強まれば、大きな可能性を持つことに充分気づいていなかったのではないかと反省させられました。

私は、帰国後もう一度職員と話し合いました。そこで出てきたことは、今までのフォローアップの在り様を考え直してみなければならぬということでした。つまり、アジア・南太平洋の草の根の人々に関わる基本姿勢はどうあるべきかということでありました。充分まとまった訳ではありませんが、現時点の基本方向を考えてみました。会員、読者のご助言が得られれば誠に幸いです。

1. フォローアップとは

1981年PHD運動発足時から、当協会は1年間の学びを終えて帰国した研修生に、フォローアップとして帰国後4年間、必要に応じて物心両面の援助を与えることを考えていました。これは、日本の援助が集中豪雨型であるという批判に対するひとつの試みであります。少なくとも1人のアジアの草の根の人に最低5年間は関わり、その人をリーダーとする地域の自立を願いつづけること、これをフォローアップと名付けたのでした。



日本から持ち帰ったカボチャを育てるプリチャーさん (タイムシキー村)

2. やって来て考えたこと

今まで、帰国した研修生に与えたものは電気式解卵器、編機等です。一部活用されているものもありますが、ネパール、フィリピンの場合、解卵器は失敗でした。ネパールでもフィリピンでも、一部に電気はありますが電圧が一定でなく、しょっちゅう停電があるのです。結局サーモスタットも動かず、今までに多くの虎の子の種卵が腐ってしまった。そしてやはり親鳥に抱かせるのが一番確実なことを再確認したのでした。研修生の気持ちは、日本の先端の機器を持ち帰りたい、われわれはつい何となくしてやりた



地域の婦人に薬物指導をするラダさん(ボカラ)

る。それはアジアの草の根の現場に立った発想でなく、豊かで進んだ日本を輸出する誤りになる。帰国後研修生は、自分の村で学んできたことながら伝えるよりも、持って帰ったものを見せびらかし、村人から更に多くのものを日本に要求するパイプにさせられてしまう。これはわれわれの考えたフォローアップではないということに気づきました。

3. 今やっていること

アジアの草の根にもの、かねのみを期待させ、自立への試みを外国のそれに依存する構造を作らせてはならない。そのために今われわれ

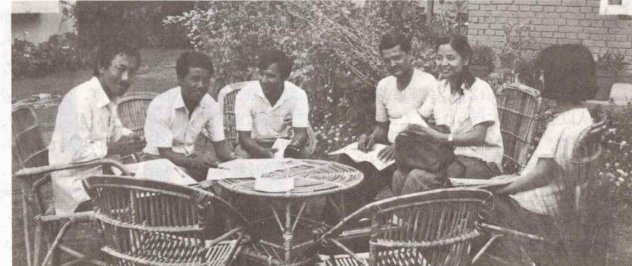
のやっているフォローアップは、彼等の要請に応え、日本で教えた現場の教師(同時に家族)をその村に送り問安と技術交流をしています。

加えて帰国した者同志が国内で定期的集まり、情報交換、研究、更には相互訪問が始まりました。

4. フォローアップの基本方向

何よりも技術を媒介にしてその村の指導者層が掘り起こされる地域組織化への指導性開発。草の根の人も持っている基本的人権の回復。このためにわれわれができることの実践。これらを考える時、われわれの草の根の人々に関わる基本姿勢が明確になってきます。それは、援助よりも協力の姿勢から一歩進んで、草の根の人々同志の交流を通して相互に状況を理解する。それを基に各々が負っている問題や課題を整理する。人の愛いをわがこととする草の根の人の優しさは必ず互いの問題や課題を負いあい、そこにみごとな連帯が生み出される。これがわれわれの願うフォローアップの基本方向なので。

草地 賢一



今後の計画を語り合うネパールの帰国研修生 左よりニールン、サンバ、アマティア、アディカリ、ショーバナの各氏。(カトマンズ)

研修生レポート

7月に来日したスリランカのジャヤンタさんをまじえ、第4期研修生4名がそろいました。他の研修生より遅れて日本語研修に励むジャヤンタさんには、大変ほほえましいものでした。個別研修の準備期間として、各地で様々な研修を体験して共同生活を行なうこと。個別研修の準備期間として、各地で様々な研修を体験して共同生活を行なうこと。個別研修の準備期間として、各地で様々な研修を体験して共同生活を行なうこと...

	9月	10月	11月
●ワイラットさん	兵庫県内農産家庭 (数ヶ所にて実習)	兵庫県内山村に滞在、保育、障人活動	津名郡五色町・柳氏宅
●ベリアさん			兵庫県内農産家庭 (数ヶ所にて実習)
●コリンさん			
●ジャヤンタさん			

東日本研修旅行では、多くのPHD協力者の人々との交流を望むべく思っています。11/25より12月中旬の予定です。詳細な日程・訪問先については近隣の会員の方々にご連絡いたします。

ワイラットさんのこと

- ① Mr. Wirrat Songsaeng (ワイラット ソンセン 男・24才)
- ② タイ北部
- ③ 養鶏・畜産 (肉用の子防、治療法) 野菜、きのこ栽培

農業機械は修理して

兵庫県豊田庄町福地 三谷 康さん
神戸大学の保田先生の紹介でPHDを知り、ワイラット君との交わりがあり、2週間あまりを並べ、夜食を共にしている時、原始的ではあるが農業の原点を垣間見る感を抱き、日本の近代農業のあり方に一歩あるべきと心算してました。ワイラット君、農業機械はすばらしいですね。自分の経営を考え、機械は修理して使わなくては、農業経営を苦境に追い込むこい魔物だよ。」



ワイラットさん



ベリアさん

ベリア スティダさん

日本の幼稚園や保育園を訪ねさせてもらって大変意義深いことです。兄弟が少なく、近代化された生活の日本では、できるだけ子供を自然に親しませ、子供同志のコミュニケーションに努めています。

ベリアさんのこと

- ① Miss Bellia Sutida (ベリア スティダ 女・23才)
- ② タイ西北部
- ③ 家政全般 (乳幼児保健衛生、栄養改善、家庭菜園、手織り、家計簿つけ)

ベリアさんのこと

ベリアさんが朝出かける時「たたいまー」と言い、楽しそうに話を聞きました。米日以来、ホームシフトの片鱗も見せ、我が家の母の素直な長女として明るい毎日を送っています。そして幼児教育の研修が始まると見事にベリアさんに変身していき、「学びたい、学びたい」といふ気持ちで動いています。そして幼児教育の研修が始まると見事にベリアさんに変身していき、「学びたい、学びたい」といふ気持ちで動いています。

ベリアさんのこと

機械文明が一切入っていない山の中で生活して来たベリアさんが、日本の社会で目まぐるしく動いている。保育所、幼稚園、小学校での教育や体面、そして夜場、農協での農村婦人の生活実態や料理講習会などに行き渡ってきたでしょうか、不安な気持ちを感じさせる毎日です。

Mr. Ranjeth Jayantha

- ① Mr. Ranjeth Jayantha (ランジェット ジャヤンタ 男・23才)
- ② スリランカ
- ③ 家畜、害虫防除

ランジェット ジャヤンタさん

私の村では、米、バナナ、パイナップル、ココナツ、とうもろこしなどの作物の他、鶏豚、牛などの家畜を飼っています。現金収入が少ないので、田植えを手伝って来た村の人々へのお礼をすることもできず、まして農薬を買えない人が沢山います。家畜の病気に對する知識もなく、農業すべて昔からの方法で行なっています。私は、日本で学んだことを通じ、今後自分の村でめざすべき農業を考えて、人々に教えてゆきたいと思ふ。



ジャヤンタさん

Mr. Yuli Thamrin

- ① Mr. Yuli Thamrin (ユリタムリン 男・24才)
- ② インドネシア西スマトラ
- ③ 様々な漁業法、養鰯(海草、かき) 水産物の家内加工技術

ユリ タムリンさん

日本に来て3ヶ月が経ちました。五色町での漁業研修中、漁獲法、養育法(養鰯)等、多くの新しい事に合うことができました。西スマトラの伝統的な漁獲方法や技術に對し、日本は、近代化的で、方法、技術共、非常に優れております。日本の漁師達の多くは、働くことに關して、疲れを知らずです。これも日本の漁師が高収入を得ている重要な要素だと思います。



ユリさん

All Night Talking Session

生活の中の国際を考える
オールナイト・トークセッション 報告!

多くの協力者のおかげでできた「KOBEL発アジア」のユニークな本の発刊を記念して何か会話をスタートしたが6月、どうせやるなら街ではなく、アジアのことをゆっくり考えることができる自然の中というこで、8月23・24日の1泊2日、兵庫県多紀郡のたんば農文塾で100人以上を集めて行われました。兵庫、大阪を中心に東京、京都、和歌山などからも参加を得て、盛り沢山の面白ナイト。研修生4名との交流会で幕をあげ、夢野台高校教諭立田先生と研修生による「アジアの音楽演奏」続いて研修生ベリアさん陣頭指揮によるカレンの料理を味わい、研修生出身地のスライド上映の後、メインイベントのパネルディスカッション。本の執筆者松岡信之、渡辺啓悟、本野一郎、坂口勝春、松中みどり(宅見徹氏はバングラデシュに渡航のため欠席)の各氏からの発言後、参加者との質疑応答。途中降雨により室内への移動があったものの、緑に囲まれた屋外会場で和やかな雰囲気の中、あつという間に予定時間をすぎ、一旦3つのグループに分けてオールナイトの話し合いが続きしました。完全徹夜組もでたようで、それぞれの生活の現場で続けられる「国際」へのかわりや語り合いました。国際協力に正面きって取組むことも大切ですが、その前に日本の国内における諸問題への地道な取組みのつらさを、それに先だつそれぞれの人の毎日の生活の姿勢が最も肝心であり、そこに継続の源があるように感じました。



アケランの合奏
パネルディスカッション

BOOKS



「KOBEL発アジア」

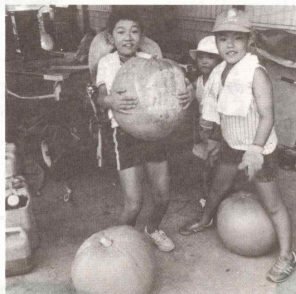
- 発行 財団法人PHD協会 ●発売 兵庫出版サービス
- 定価 380円
- お問い合わせは、PHD協会兵庫出版サービスまで (電話078-371-218) 2番店にて「地方出版流通センター扱い」といってご注文いただけます。上記発売元へご注文下さい。



日常生活の中で具体的なことがらに、こだわりをもつことからは「国際」は出発する。この本は、日常の生活の中から国際が生まれることが、わかり易く、具体的に書かれています。一読していただき、共に生きる宇宙船地球号に乗ることをぜひ試してください。

草の根生活塾レポート

今回(8/19-23)の草の根生活塾は、子供達を中心に農家に滞在させて頂き、農作業を通して、食べ物などがどのように育てられているか、農家と自分たちの生活がどのように違っているかを知り、考える事が大きな目的だった。第1日目は、農家でのオリエンテーション、薪での食事づくり、研修生とその国の紹介が行なわれ、翌日、小・中・高校生9名を含めた14名は4つの農家に分かれて2泊3日の農業体験が始まった。滞在農家は、自然卵養鶏、無農薬の作物栽培、多勢の方々が働く養豚農家などで、それぞれが違った作業を取り組んだ。子供たちにとって、草引きや鶏の飼料づくり



ポンキンカボチャの大きさにびっくり



みんなでまきを切る

などは、暑くて単調なしんどい作業だったが、農家の人たちの大変さを少なからず感じ取ったようだ。それだけに、作業の合間に出て頂いたスイカや畑でもいたトマトの味は忘れられないものにな

ったと思う。また、特に印象に残ったことは、生みたての鶏の卵を採った時のうれしさや豚の出産や去勢に立ち会った時の驚きと臭気悪さなど、今まで知らなかった体験だったようだ。報告会では子供達はそのように語り、そして来年も参加したいと生き生きたい。報告会後は研修生も加わって卵だめし！みんなで最後の農塾での夜を楽しみ過ごした。私たちにとっての裏りと収穫が、いつ、どのような形で表われるのかは分からない。しかし「農」を考える時、現在私たちを取りまく状況をより理解し、出発への確かな指針を示してくれるように思える。(草生塾リーダー 辰巳玲子)



トりにエサをやる

ニワトリに、けられたけど… 草生塾レポートから

- ニワトリの卵とりの時に、こわがってすみいたらニワトリにけられた。とてもホカホカの卵があった。(富田涼子・小6)
- やっぱ草とりが一番おもしろくなかったなと思う。ほんとうにこしがいたい。(岡田篤志・小6)
- 牛のえきのおいをかいたら、お酒のおいがあった。(寺田こず恵・小5)
- 農家はのはほんとして家庭があたいたか。(武内秀元・小6)
- カン人の子は、みんな、仕事があるということは少しびっくりしました。(池野理恵・小6)
- 農塾のかまどでたいごはんはこげていて、少しかたかったけどおいしかった。(石原三紀子・小5)
- 1日めに、6人も友だちができました。(坂本麻有・小4)

「亀ちゃん」こと亀岡学くんは、「やさしい、のんびりした、マイペースで沉着冷静、そして好き嫌いのない大食漢」と評判の生徒会長ですが、直接会ってみるとなるほど評判どりの素朴な好青年だと納得がいります。彼がPHD運動にかかわったきっかけは、兵庫商業高校の創立記念日に先輩に連れられ岩村昇博士の講演を聞いたことだといえます。その後、古切手でも集めればBCGとなり、人ひとりの命を救えるということを知り、それなら自分たちはアルミ缶ひろいから始めてみよう、と、生徒会の仲間とPHD運動をはじめとするボランティア活動に協力を始めました。その「亀ちゃん」に若い目でとらえたボランティア活動やアジアについて語ってもらいました。



ヤングのコーナー

青春の胎動

地図的視野より 地球儀的考え方を!

亀岡 学(かめおかまなぶ)
神戸市立兵庫商業高等学校3年17才
生徒会執行部会長
〒651-11 神戸市北区鈴蘭台北町7丁目19-1
TEL.(078)592-2930
(取材・構成 三河圭一)

まずPHDにかかわってから、新聞の読み方ひとつにしても、それまでは三面記事、スポーツ欄、4コママンガくらいしか読まなかったのが、アジア関連記事に関心を持って読むようになったそうです。実際にアジア(特にフィリピン)に行くと、教科書やマスコミにとりあげられない部分を見たいとまで思うようになり、全く関心を示さない友人たちをさみしく思うこともあるとか。そういった

外への関心が彼の中で内への批判や疑問に変化してゆきます。亀岡君は、日本はひどく「地図的」考え方で、いつも自国を世界、特にアジアの中の中心に位置づけているような気がしてならないと言います。もっと「地球儀的」視野が必要だと。もちろん一朝一夕で意識の大変革ができればいいはずもないが、だからこそ身近なところから始める大切さを主張します。彼はまた、ボランティアのあり方自体にも疑問を感じています。なぜとらてボランティアだ、国際協力だとおおげさに身構えるのか? 気持ちさえあれば、簡単にできるのにと残念そうです。PHDのことを他の仲間にも伝えていきたいと言ってくれます。「研修生と身ぶり手ぶり、カタコトの日本語でやりとりして友だちになる楽しさから、アジアの人と一緒に生きていくことの大切さを感じている」という亀ちゃんの話は決して流暢ではなく、しばしばつらりと選言言葉が飛び出て、最近流行の「新人類感覚」に不安を感じる旧人類は実にほっとしたのでした。どうか「亀ちゃん」のままで、もっと大きく成長してほしい。



PHDの基本軸とは— 援助・協力から交流・連帯へ

去る七月タイの都バンコクで会った友人と大切な話し合いをしました。彼はこういいます。「欧米、日本の援助、

協力は有難迷惑だ。確かに我々は、かねもものも不足している。だから蔵のはありがたいことだ。しかしそれを送ってくれる人々が我々の本当の要求を理解して下さる事が、もっと嬉しい。実は我々の要求は送ってくれる人々と同じものを要求しているのだ。ベーシック・ヒューマン・ライツ(基本的人権)そしてベーシック・ミニマム・ニーズ(基本的最小限の欲求)。先進国政府が開発援助を進める相手国政府はその国の5%~10%の上流階級の人々の権益を代表するものが多く、少なくとも75%の草の根の人々はむしろ基本的人権を擁護され最低限の欲求を満たすことにも不自由している。その人々に対する援助、協力はともすれば持てる者が同情でものやかねを送る、援助を受ける国の政府が政治的責任よりもチャリティーで貧しい者に施しをする、といった構図はいつのまにか草の根の人々を疎外し、より多くの同情や施しを引き出すプロまで出て

くようになった。ここには人間の尊厳を大切にす視点よりも、人間の弱点を増大する結果が導き出されている。今アジアに必要なことは、草の根の人自身が自分の持っている基本的人権に自覚め、それを回復することである。その為に第一に必要なことは、ものやかねでなく草の根の人が起きることである。」僕はこの十年余りずっと開発援助、協力という言葉になかなか馴染まないのを感じていました。この話し合いを通じて少しははっきりしてきたのは、援助・協力から交流・連帯へという図式です。アジアに関わるということは、10%の上流の人々から、90%の草の根の人が何れかであって中立は無い、ということも強く感じています。今回のアジア出張で、PHDの基本軸を再確認させられたことに感謝しながらドンムアン空港を飛び発ったのでした。

草地賢一

PHD NEWS

基金寄託状況(会費・ご寄附)

1986年 5月	¥1,239,399	181件
6月	¥3,952,261	122件
7月	¥3,081,266	146件
	¥8,272,926	449件

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附を頂戴いたしました。慎んでお礼申し上げます。

評議員会報告

7月30日、兵庫県立のじぎく会館で、第3回評議員会が開催され、活動報告、基金造成事業報告にもづく審議および定期評議員についての話し合いをもちました。

アジア・スタディツアーのご案内

㊤タイ北部
第3期生プリチャーさんの活動するカレン人の農山村を訪ねるツアー。
期間予定 12月26日~1月2日 7泊8日
コース 大阪⇨バンコク⇨チェンマイ⇨農山村
費用予定 19万円
募集人員 15名
申込締切 11月10日

㊥ネパール
第1・2・3期研修生8名の活動現場を農山村に訪ねるツアー。現地では数グループにわかれ

て行動します。
期間予定 12月21日~1月2日 12泊13日
コース 大阪⇨バンコク⇨カマンズ⇨農山村
費用予定 27万円
募集人員 15名
申込締切 11月10日
原稿執筆時には年末の航空料金を、フライトスケジュールが未確定のため、日程・費用に関しては若干の変更が予想されます。詳しくご案内につきましては別途お送りしますので協会までご請求下さい。

ロータースクーボン受付住所変更

これまで長野県の清水真裕美さんに取り扱いをお願いしておりましたロータースクーボン、グリーンスタンプ、ブルーチップの送り先がPHD協会に変更となりました。今まで通り宜しくご協力の程お願い致します。清水さん、長い間ご苦勞様。ありがとうございました。

ネパール・フィリピンフォローアップ スタディツアーレポート完成

PHDフォローアップスタディツアー(ネパール…'85年12月実施・フィリピン…'86年3月実施)に参加した人々のレポートが冊子となりました。小・中・大学生から主婦を含む一般の人々の素朴な体験が語られています。ご覧

になりたい方は、送料込300円分の切手を添えてPHD協会までお申し込み下さい。



編集後記

PHDレターも、1号発行から4年余、脱皮をくり返しながら20号を迎えました。このたび総主事が現地でフォローアップのあり方の軌道修正をしてみました。その基本軸は草の根の人たちの自立のために知恵を出しあうことによって相手を理解し、ひいては自らを問うことにあるようです。つまりPHD運動とは本来足もとを見ることから始まると言えるのでは……レター編集のかたわらは「KOBE発アジア」発刊記念のオールナイトトークセッションのために100人分のカレン料理、ネパール料理の材料調べ、トイレ臨時増設の任命などで喧々囂々、PHD会員の他に遠くは福井、舞鶴、広島などからの参加者もあり、この会の主旨「生活の中の国際」に対するたしかな手ごたえを感じました。PHDのこの種の催しに今後ご注目下さい。(E.A)